

聖書の翻訳

正教会日本語訳
聖ニコライ・中井訳について



「聖書」とはどのような書物なのか

《「聖書」－ 神聖な書物》

聖書を読むときは、常に次のことを念頭に置かなければならない。すなわち、聖書は科学的な論文でも、哲学的な教条でもなく、人類の救いに関して神が啓示した真理を収めた書物だということである。

聖書は、我々に、天体がどのように運行するかではなく、我々が如何に靈的な天に到達すべきかということについて語っている。聖書は、主が、イスラエルの民を仲介として、人類に対する己の慈愛の故に、あらゆる民及びあらゆる人々に救いをもたらすために何を如何に為したのかを、我々に叙述している。

自然科学と歴史に精通したいと望む者は、自然科学及び歴史に関する書物を読まねばならない。しかし、自分がどのように救われるべきかを知りたい者は、聖書を読まねばならない。

聖書は、諸預言者や諸使徒と呼ばれる神に選ばれた人々を通じて、聖神^oからの靈感と啓示に基づいて書かれた書物の集大成である。このように、聖書の書札は、神の靈感を受けた人々によって書かれているので、これらの書札を神聖な書物(聖書)と呼ぶのである。

聖書は2部に分かれている、すなわち旧約と新約である。

「約」という言葉の意味は、「神と人々との盟約」である。旧約は、既にアダムの時代に締結され、救主ハリストス、即ち神の子がこのよに来临することによって成就した。救主の来临とともに神と人々の間に新約(新たな盟約)が制定され、それは今日まで続いている。

聖書は、14世紀の間にわたって編纂された。そこに収められている書札は、アラビアの荒野、パレスチナ、バビロン、ギリシャ、ローマにおいて、さまざまな生い立ち、さまざまな社会的地位にある人々たちによって書かれてきた。

聖書の内容には、性格的に変化があるとしても、そこには驚くべき一貫性が見られる。全書札を通じて、聖にして偉大な理念が一本の赤い糸となって貫かれている。その理念とは、即ち神の国から墮ちた人類の訓育と救贖である。

聖書が至聖なる神の神聖なる言であるならば、それを読む人にも深い信仰と敬虔さが必要である。信仰とは、すなわち我々の肉体的な目では見ることのできないものを観る内的な靈的視覚である。我々が、聖書の聖なるページを、神への熱い生きた信仰なしに開くとしたら、我々は、それをただ単に人間の知が生み出したさまざまな非現実的な説話がつまった文学作品として受けとめるであろう。靈的視覚を喪失した不信仰な人々は、己の不信仰な靈のゆえに、聖書の中に靈の救いとなる真理を把握することができず、その中に神を見出すことができない。しかし深い信仰を持つ人間は、聖書を読むとき、まさに神と対話するのである。なぜなら聖書は、神がそれによって人々と話す言葉そのものだからである。

* 出典:『聖書史 第一部、旧約聖書』(著者:B.N.プシュカリ[現、ウラジオストック及び沿海州の大主教ベニアミン]、1979年、聖三者セルギイ修道院発行)

聖書の言語と翻訳

旧約聖書は、最初に古代ヘブライ語で書かれ、新約聖書は、最初にほとんどの書札がギリシャ語で書かれた。

■主ハリストスは、古代ヘブライ語の聖書を用いて教えを述べた。

■初期の正教会は、ギリシャ語聖書を用いた。
七十人訳聖書(セプトゥアギンタ):各地に離散したユダヤ人のために、エジプトのアレクサンドリヤで、紀元前3世紀中ごろから約100年間で訳された。約70人の学者によって訳されたという伝説から「七十人訳」と呼ばれる。

■9世紀になると、聖キリル及び聖メフォディの兄弟により、スラヴ語の聖書が現れた。聖キリルと聖メフォディは、「スラヴ民族の師」と呼ばれ、「使徒」として列聖されている(記憶日:5月25日)。

■聖シンド訳:1876年にロシア語訳が完成する。

■ヴルガタ:聖イエロニム(348~420)によるラテン語訳聖書。七十人訳聖書とは別に、直接ヘブライ語聖書からラテン語に翻訳した。次第に西方カトリック教会の標準的聖書として普及する。

■プロテスタント教会は、ルター訳聖書をはじめとし、独自に様々な言語に翻訳を行っていった。
ルター訳聖書:マルチン・ルター(1483~1546)によるドイツ語訳聖書(新約聖書と旧約聖書)。

■ペートル小野成篤訳:『旧約聖史略』、1876年
■堀江復訳:『新約聖史略』、1876年
■マトフェイ上田将訳:『馬太伝福音書』、1892年
など

■ニコライ・中井訳:日本ハリストス正教会教団の正教会訳。新約聖書は、1895年に聖ニコライとパウエル中井木菟麿が着手し、その後検討を繰り返し、1901年(明治34年)に『我主イイススハリストスの新約』を日本正教会訳として東京正教会より出版。(正教会の祈祷文全般の和訳に関しては、聖ニコライと中井木菟麿の共同作業が、既に1882年より始まっている)。

正教会
日本語訳

正教会における旧約聖書・新約聖書の正典書札一覧表

《旧約聖書(全39書札)》 (正教会訳の書札の名称)

創世記
エジプトを出づる記
レウイト記
民数記
申命記
イイスス・ナウイン記
士師記
ルツ記
列王記第一卷
列王記第二卷
列王記第三卷
列王記第四卷
歴代誌略第一卷
歴代誌略第二卷
エズドラ記
ネヘミヤ記
エスフィル記
イオフ記
聖詠
箴言
伝道書
ソロモンの歌
イサイヤの預言書
イエレミヤの預言書
イエレミヤの哀歌
イエゼキイリの預言書
ダニイルの預言書
オシヤの預言書
イオイルの預言書
アモスの預言書
アウディヤの預言書
イオナの預言書
ミヘイの預言書
ナウムの預言書
アウワクムの預言書
ソフォニヤの預言書
アゲイの預言書
ザハリヤの預言書
マラヒヤの預言書

◎参考: 日本聖書協会訳の旧約聖書書札の対応する名称)

創世記
出エジプト記
レビ記
民数記
申命記
ヨシュア記
士師記
ルツ記
サムエル記上
サムエル記下
列王記上
列王記下
歴代誌上
歴代誌下
エズラ記
ネヘミヤ記
エステル記
ヨブ記
詩篇
箴言
伝道書の書
雅歌
イザヤ書
エレミヤ預言書
哀歌
エゼキエル書
ダニエル書
ホセア書
ヨエル書
アモス書
オバデヤ書
ヨナ書
ミカ書
ナホム書
ハバクク書
ゼバニヤ書
ハガイ書
ゼカリヤ書
マラキ書

《新約聖書(全27書札)》 (正教会訳の書札の名称)

マトフェイに因る福音書
マルコに因る福音書
ルカに因る福音書
イオアンに因る福音書
聖使徒行実
イアコフの書
ペトルの前書
ペトルの後書
イオアンの第一書
イオアンの第二書
イオアンの第三書
イウダの書
ロマ人に達する書
コリンフ人に達する前書
コリンフ人に達する後書
ガラティヤ人に達する書
エフェス人に達する書
フィリッピ人に達する書
コロサイ人に達する書
フェサロニカ人に達する前書
フェサロニカ人に達する後書
ティモフェイ人に達する前書
ティモフェイ人に達する後書
テイトに達する書
フェイリモンに達する書
エウレイ人に達する書
神学者イオアンの黙示録

※正教会の旧約聖書の正典は39書札、新約聖書の正典は27書札、併せて66書札が正典とされる。
※正典とは、神・聖神^oの恩寵による靈感と啓示を受けて書かれたと教会が認めるもの。この他に外典と呼ばれるものがある。これは靈感を受けた神の啓示ではないが、教訓書として教会が認めたもの。

聖ニコライ・中井訳の新約聖書翻訳の過程

聖ニコライとパウエル中井木菟麿が、現在私たちの手もとにある日本語正教会訳の新約聖書を、いつ、どのように作り上げていったのか、その過程を聖ニコライの日記で辿ってみよう。

* 出典: «Православное слово в Японии: сице убо молитесь вы» Г.Е. Бесстремьянная, (Церковь и время) 2006 №1

※以下、日付は全て新暦。

[正教会の最初の日本語訳聖書]

最初の聖書の翻訳は、聖ニコライとパウエル中井によって1889年に行われた。これは、1852年に米国聖書協会が出した中国語の新約聖書を基にしている。訓点を用いた漢文式のもので、全て漢字で書かれている。奉神礼用の大きな装丁のものと、一般信者用の小さな装丁のものとの2種類の装丁で発行された。

この翻訳は、二つの点において難点があった。一つは、元のテキストである米国プロテスタント教会の神学用語がそのまま導入された点。もう一つは、全て漢字で書かれているため、読まれているテキストを耳で聞いただけではわからず、意味を理解するためには目で漢字を確かめなければならなかった点である。

このような理由で、6年後の1895年、聖ニコライとパウエル中井は、白紙から聖書を翻訳しなおすことにした。その最初の日、1895年9月2日の聖ニコライの日記には、つぎのように書かれている。

[現在の正教会訳の新約聖書]

1895年9月2日

「夜の6時からパウエル中井と仕事にとりかかった。新約聖書の翻訳である。マトフェイ伝から始める。最初の16節を翻訳した。つまり名前(イイスス・ハリストスの系図)を書き写したということだ。それでも福音書と新約聖書の題名について、また「神・子」の「子」について「子」なのか「^{すえ}裔」なのかなど長いこと議論した。日課の9時の晩の祈祷により仕事を中断した」。

1895年12月5日

「今日、ルカ伝の翻訳を終えた。神に光栄！ 明日からイオアン伝にとりかかる」。

1895年12月23日

「パウエル中井との翻訳の仕事は、年内は今夜をもって終了する。9月から今日までに3つの福音書とイオアン伝の10章までを翻訳した」。

1896年1月5日

「聖体礼儀において、またその後、徹夜祈において、今日初めて私たちの翻訳した福音経が誦読

された。これからいつもこの福音経を誦読していく。自分たちでどのような翻訳なのかを確かめ、また他人の評価も聞いて、まだ印刷しないうちに改めるべきところは改めるためである」。

1896年3月25日

「使徒行実の翻訳を終わった。これで復活祭までの仕事は終わった。この新しい訳を復活祭の夜、聖堂と十字架教会において読むために、中井が写しの最後のチェックをする」。

1896年4月4日

「夜の7時から聖堂と十字架教会において使徒行実の誦読が始まった。今、私たちの翻訳によって、初めて使徒行実が(日本語で)読まれたのである。今日のために二冊の写本をやっとのことで間に合わせた。私も十字架教会と聖堂において章を一つ誦読した。聖書はどのように誦読するべきかを示すために、大きな声で、はっきりと、急がずに…」。

1896年9月25日

「昨日、ガラテヤ人に達する書の翻訳を終わり、今日、エフェス人に達する書の翻訳に入った。午前中、朝7時半から12時までかかって翻訳したのは、たったの8節である。9節で行き詰まった。何年かかっても翻訳不可能ではないかという気さえする。いろいろなテキストをひっくり返し、全ての注解書を読み返したが、「恩寵」が誰にかかっているのか未だにわからない。「神・父」なのか「神・子」なのか。

中井は、筆記用具をしまいながら苦笑して言った。『聖書を理解するという事は、なんと大変なことでしょう。信仰の無い人たちは、旧約と新約くらい読みましたと簡単に言いますが。あたかもわかりきった簡単な本であるかのように』…」。

1896年9月28日

「エフェス人に達する書の第一章は、わかり易い日本語にするのが難しい。あまりの難しさに私は出口を見失った。もう考える気力も、書く気力もない。今日は、もう翻訳するのは止めよう」。

1896年12月8日

「今朝、パウエル中井と新約聖書の翻訳を終えた。今年の9月から始めたから、一年以上かかったということだ。毎日朝7時半から正午まで、そして夜6時から9時まで翻訳してきた。これから、校正して印刷に踏み切るまでに一年以上かかるだろう。毎日、良い翻訳のために全力を投入しつつも、完全に満足して終えた日は一日も無かった。原文を明確に理解し、それを表現するためにあらゆる方策を用いた。私たちの前には常に3種類のギリシャ語の聖書、2種類のラテン語の聖書、スラヴ語の聖書、ロシア語の聖書、英語の聖書、フランス語の聖書、ドイツ語の聖書、3種類の中国語の聖書、日本語の聖書、ロシア語と英語の注解書、あらゆる辞書類が置いてある。毎日、ほとんど一時間ごとにこれらの本にあたってみなければならなかった。とにかく細心の注意を払った。そこまでしても今の現在の翻訳に満足できない。もちろん中国語聖書や既成の日本語聖書よりは良いが…。私たちの日本語訳は少なくともわかり易いし、文脈が通っている。…」。

1896年12月28日

「昨日、私と中井で翻訳した聖使徒公書を全部そろえて誦経者パウエル・オカモトに渡した。これから聖堂での奉神礼の際に誦経してもらおう。衆人にわかりやすいかどうかを見てみよう」。

◎このようにしてできあがった新約聖書の第一回目の校正は、1897年1月19日の朝から始められた。

◎校正の過程は、聖書の中に出てくる単語一つ一つの意味を確認しなおすことから始められた。そのために『新約聖書注解辞典』、P.A.ギルテブラント編纂(1885年)が用いられた。この注解辞典は1988年に復刻版が出ている。全6巻で、各巻は約400頁である。この注解辞典の特徴は、アルファベット順のコンコルダンスであるばかりでなく、単語ごとに解釈のための注解が書かれており、この単語の使われている箇所が示されているばかりでなく、その単語を含む節が全部(または一部)書かれているという点である。聖ニコライとパウエル中井は、この注解辞典を始めから一単語ずつ吟味し、それを表現できる最も適切な日本語の漢字を探したのである。聖ニコライの日記には、1897年12月27日に「вина(罪)」という単語まできたこと、1898年1月は「вера(信)」という単語から始めたこと、1898年の復活祭までに「дом(家)」という単語まできたことなどが記されている。そして遂に日本語聖書訳の歴史の中において顕著な訳字「дух(神[°])」まで来る。この「神[°]」という訳字を決めた日の日記に聖ニコライはつぎのように書いている。

1898年4月28日

「朝から例の新約聖書の校正にとりかかる。「дух」まできた。新約聖書の全ての単語の中で一番難しい言葉である。如何に訳すべきか。日本人がもう随分昔に使わなくなった「シン」という字があるが、これはもう辞書の中にすら収録されていない。この字を使うとすれば、生きている人間の間にミイラを置くようなものだ。新しい漢字を作るべきだろうか。しかし、「シン」がだめなのと同じように、今度は生きた人間の間に、でっちあげの人形を置くようなものだ。思うに、一番良い方法は「神」という字を使って、「дух」の意味であることを表す「[°]」を付けることだ」。

◎聖書の中でも福音書は、至聖所の宝座の上に置かれる特別な書である。福音書は、信者が手にとって家で毎日読むための装丁のもの、宝座の上に置いて、奉神礼の中で読み上げる特別大きく美しい装丁のものと作られる。聖ニコライは、ここで初めて聖堂の宝座の上に日本語訳の福音書を置くところまで来たのである。それは1899年のラザリのスポタの前であった。そのときの聖ニコライの日記には、つぎのように書いてある。

1899年4月22日

「すぐれた書家であるアレクシイ・オオゴエ翁が、福音書にふさわしい清冽な大きな文字で書いてくれた。昔のロシア製の宝座用福音書からとった金色の木製の表紙をつけて装丁した。装丁には濃い赤紫のビロードを用い、ページの端は金色になっている。しおりの布の幅は、殆どページ幅で、端に巡洋艦「ロシア」の印像が押されている(この福音書を作るための献金をしてくれた)。福音書はロシアのどんな聖堂に置いても恥ずかしくない出来である。昼間、私はこれを成聖した」。

◎1897年1月19日から始められたギルテブラントの注解書に基づく最初の校正は、1899年11月28日に終了する。しかし、聖ニコライは、12月からさらに二回目の校正に入るのである。

1899年11月28日

「今夜、ギルテブラントの注解書による新約聖書の全ての単語の校正が終わった。今度は、幾つかの重要な言葉についてもう一度見直さなければならない。その後、文法の専門家と一緒に翻訳文が文法的に正しいかどうかを確かめなければならない。その後、全部を注意深く読みなおしてから印刷できるだろう。神が助けてくれれば来年には」。

◎1899年12月から始められた2回目の校正は、1900年3月31日に終わる。

◎そしてさらに3回目の校正に入り、1900年6月26日に3回目の校正が終わる。この間にも、聖ニコライと中井は、文法について、適切な訳語について、神品や信者たちと議論に議論を重ねている。(例:「読まざりしか」が正しいのか、「読まざりしや」が正しいのか。「庭造り」と「葡萄造り」とどちらが良いか。スラヴ語の「смущается」は、「憂うる」と「心乱れる」とどちらが適訳か。などなど)。

◎1900年9月からは、句読点の校正に入る。句読点の校正をしながら、まだ文法的に解決できていない点を、聖ニコライは、ここで日本語文法の権威である国文学者(大槻文彦、落合直文、林甕臣)の意見を聞きながら最終的に解決する。

◎1900年11月14日、新約聖書の印刷の段階に入る。印刷屋は、幾つかの漢字と「神°」の「°」について新たに型を抜くことになる。

1900年11月17日

「もう印刷する時期だ。正教会訳を待ち焦がれているのは正教信者ばかりではない。プロテスタントの人たちもいつ出るのかと一度ならず私に聞いてくる」。

◎1901年の聖大木曜日の夜、12福音までに、この印刷で出来た最初の一冊を製本することができた。

◎1901年10月4日の日記に、聖ニコライは、印刷された正教会訳新約聖書を各教会、各神父、各伝教者全員に一部ずつ送ったこと、そして彼らから、今や神の言葉は日本人にとってわかり易いものとなったことについての反響がたくさんあることを記している。

◎ここに引用した聖ニコライの日記は、新約聖書の翻訳の過程に触れている箇所の中のほんの一部であるが、そんな中からも私たちに伝わってくるのは、聖ニコライとパウエル中井の聖書翻訳に対する真摯な態度である。多大な時間と労力をかけ、さまざまな困難を乗り越え、文字通りできる限りのことをしたうえでさらに、周囲の人々の反響に耳を傾けようとする謙虚な姿勢、また奉神礼のときに聖堂で誦読するのはどのようにしたらよいかを自ら見せる聖ニコライの親身な慮りなどが窺われる。

《聖ニコライ・パウエル中井訳に対する評価》

◎この『新約』の訳は、聖書翻訳委員訳の『新約全書』が、早くも1882年(明治15年)に植村正久によって批判せられて以来、この1900年前後には改訳を要するとの声が高まっていたのに比して、これは遙に細心の注意を払って語彙を選び、優れた荘重な文体をもってなされたものと言える。

(出典:海老澤有道『日本の聖書』日本キリスト教団出版局、1981

年)

◎ニコライ大主教の翻訳は、他教派の宣教師からも高く評価された。次に挙げるのは、プロテスタントの監督であったアメリカ人宣教師ジェフェリスが手紙の中で書いた批評である。

「ニコライ大主教の翻訳について人々がなんと言おうと、彼の『使徒行伝』と『ヨハネ福音書』の訳が、現在ある他のどの訳よりも格段に優れているということは、疑いようがない。」

(出典:アレクセイ・ポタポフ『明治期日本の文化における東方正教会の位置および影響』東京大学大学院修士学位論文、2000年)

◎ニコライ大主教の翻訳が学問的に見て、この上なく偉大な業績であることには、いささかの疑いもない。(出典:ポズネーエフ著、中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』講談社、昭和61年)

《正教会訳新約聖書ができるまでの過程: 聖ニコライとパウエル中井の翻訳作業》

◎本資料の5ページから8ページまでの日記に書かれている過程を日付を追ってまとめると下記のようなになる。

1899年	最初の正教会日本語訳新約聖書(訓点を用いた漢文式のもの)
1895年9月2日	新約聖書の翻訳開始(上記の日本語訳聖書の難点を改めるべく白紙から翻訳作業を始める)
↓	
1896年12月8日	新約聖書の翻訳終了
1897年1月19日	第一回目の校正開始
↓	
1899年11月28日	第一回目の校正終了
1899年12月	第二回目の校正開始
↓	
1900年3月31日	第二回目の校正終了 第三回目の校正開始
↓	
1900年6月26日	第三回目の校正終了
1900年9月	第四回目の校正開始(句読点と文法の最終校正)
1901年聖大木曜日	最初の印刷で刷り上げた第一冊目を製本
1901年秋	全国の教会、神父、伝教者たちに一冊ずつ送付

聖ニコライ・中井訳の特徴

《翻訳に対する聖ニコライの姿勢》

ニコライ大主教は、その翻訳の仕事において、他を模倣することが全くなかった。この点では、彼は極めて厳格であって、次のように語っていた。

「私は自分の方針として、聖書の翻訳は、カトリックの訳もプロテスタントの訳も決して読みません。それらの訳の影響を受けたり、知らない間に何かを借りてきたりするおそれがあるからです。自分の正教理解を出発点として、自分で日本語の文章語のさまざまな難しさを克服し、正教のテキストに合致した言葉を探すほうが、正教以外の派の翻訳に従って、その出来合いの用語を借りてくるよりはましです。」

翻訳の仕事に対する大主教の態度がこのようであったから、結果として、いわば全く独自の日本語の正教神学語彙集がニコライ大主教によって作成されたのだった。これは学問上大きな意義を、

持つ膨大な語彙収集の業績である。ニコライ大主教の訳語は、正教の教会スラヴ語ならびにギリシャ語の単語の正確な訳語なのである。

ニコライ大主教の翻訳をめぐって、ポズネーエフが語り合った数人の日本人も、正教以外のキリスト教の宣教師たちも、一様に指摘するのは、次の二点である。(1)原文の意味を正確に伝えている。(2)日本の一般大衆にとってはかなり難しい漢字が使われている。後の点について、ニコライ自身は、次のように言っていた。

「私は、福音書や奉神礼用諸書の翻訳が、大衆の教育程度まで降りてゆくべきではなく、逆に、信者たちが福音書や聖体礼儀用諸書のテキストを理解できるところまで昇ってゆくべきだと考えているのです。福音書に卑俗な言葉を用いるのは認め難いことです。全く同じ意味の二つの漢字あるいは言い方があって、日本人がそれを読み、あるいは聞いたときに、両方とも同じ品位を感じるという場合であれば、もちろん、私は一般に広く用いられている方を採ります。しかし、翻訳の正確さという点になると、たとい日本ではあまり知られていない漢字を使わねばならないとしても、いささかの妥協もする気はありません。私の翻訳を理解するに、日本人がときにはかなり神経を集中して読まねばならないということは、私自身感じています。しかしその理由の大半は、日本人にとって正教そのものが新しいことだという所にあるのです。そのような批判は最初のころは今よりも強かったのです。私たちの翻訳局の事業が発展してゆき、日本で正教神学の書物が出版されてゆくに連れて、日本人はおのずと正教・キリスト教の考え方に慣れてきて、それによって日本人にとって私の翻訳も前よりわかりやすくなってきているのです。」

(出典:アレクセイ・ポタポフ『明治期日本の文化における東方正教会の位置および影響』東京大学大学院修士学位論文、2000年)

《聖ニコライ・中井訳の翻訳法》

聖ニコライ・中井訳は、日本語の聖書訳の中でも正確であると評される理由の一つは、前掲の日記でも見たように、一つ一つの単語の正教神学の解釈を詳細に調べるとい根気強い作業を行っているからである。そして、もう一つの大きな理由は、この正確さを支えている訳語の作り方にある。これは、日本語だけを見ていると気が付きにくいかもしれないが、「教会スラヴ語→日本語」という発想の中で、両方のテキストを見ていると、彼らの翻訳法に一つの特徴があることに気が付く。

それは、教会スラヴ語の語根(ルート)一つに対して、漢字を一つ当てるというやり方である。例を幾つか挙げてみよう。

[教会スラヴ語]	[正教会日本語訳]
1) <u>Богородица</u>	生神女
↓ ↓ ↓	
神 生 女性を表す接尾辞	
2) <u>Благословение</u>	祝福(教会や主教品、神品の)
<u>Благослови</u>	福をください(祝福してください、の意)
<u>Блаженный</u>	福者(聖人の称号の一つ)
<u>Блаженни</u>	<small>さいわ</small> 福いなり(真福九端の述部など)

前ページの2)の例では、「Благ- (Блаж-) 」という語根に「福」を当てるといふ翻訳の仕方であるから、ロシア語のほうが文法的にどんな形をとっても、日本語のほうは「福」といふ漢字で対応することを原則としている。従って、真福九端の中では、「福さいわいなり」といふ形で、読み方に工夫を凝らしている。もし、後世の人がこの部分を、読みだけで判断して「幸いなり」といふ漢字を当てたとすると、折角の訳語の統一性が崩れてしまう。また「幸」よりも深い意味として、神・聖神[°]の恩寵を表すために「福」といふ漢字を選んだ意味が伝わらなくなってしまう。

〔教会スラヴ語〕	〔正教会日本語訳〕
3) Богоприимец	抱神者(聖シメオンのこと)
↓ ↓ ↓	
神 抱く、受ける 男性を表す接尾辞	
Богоносец	捧神者(聖人の称号の一つ、常に霊の 内に神を持っていた/捧っていた人という意味)
↓ ↓ ↓	
神 所持する 男性を表す接尾辞 運ぶ	
4) Владыка	主宰(神のこと)/(主教品にも使う)
↓	
主権、君臨	
Владычица	女宰(生神女のこと)
↓ ↓	
主権、君臨 女性を表す接尾辞	

上記のような翻訳法によって、全ての単語が訳されている。従って、逆に日本語から見た場合、同じ漢字を使った単語は、教会スラヴ語において(殆どの場合)同じ語根であるということが言える。

このように、一つの語根に対して、一つの漢字を選んだら、それが文法的にどんな形になってもあくまでもその漢字を用いるのであるから、日本語には本来無い単語が次から次へとできるかわりに、訳語の正確さは守れるのである。そして前記の聖ニコライの翻訳の姿勢で見たように、聖ニコライはその新しい単語や、難しい漢字を理解してほしいと言っている。そうすることによって初めて、日本語による正しい正教理解が可能になるからである。

聖ニコライ・中井訳のテキストの命は「漢字」である。現代の人たちが、難しいからと言って、「音」を頼りに簡単な漢字に安易に置き換えるとすれば、それは、正教理解の糸口を失うことである。そればかりでなく、現代において正教会日本語訳を行う場合には、正教要理や定理神学において聖ニコライ・中井訳の既訳の訳語にまず通じることが前提となる。さもないと、翻訳者が違う度に新しい訳語が現れることになり、一つの正教概念に対して、幾つもの日本語訳後が現れ、理解の混乱を招くからである。

もちろん、常に同じ語根に同じ漢字を用いるわけにはいかない単語もある。それは、一つの語根が、既に幾つもの意味を持っている場合である。例えば「**жизнь**」=「生命、人生、生活」などである。

次に、正教会訳の漢字の選び方の中から、秀訳中の秀訳と言える例を一つ挙げてみよう。この訳を見ていると、教会スラヴ語と漢字というのは案外相性が良いのではないかという気さえする。また、一般に「わかり易い」と言われる日本語が、正教理解のために本当に「わかり易い」のか、ということは今一度考えるための良い例ではないかと思う。

〔教会スラヴ語〕

Дух Божий носился над водою.

〔正教会日本語訳〕

神の神[°] 水の面に^{ふいく}覆育せり。

(大斎第一週奉事式略より)

〔日本聖書協会訳〕

神の霊が水のおもてをおおっていた。

上記は、創世記の始めの箇所(1章2節)である。

ここで注目したいのは、教会スラヴ語の「НОСИЛСЯ」という単語を、どのように訳したかという点である。正教会日本語訳は、一見難解な「覆育せり」という言葉を使っている。それに対して日本聖書協会訳は、「おおっていた」というごく普通の日本語を当てている。この二つの訳語の違いはどこにあるかと言うと、「おおっていた」というのは、「覆育せり」の「覆」という字と同じなので、正教会日本語訳には「育」という字がさらに付け足されているというところにある。なぜここに「育」という字が必要なのか。

原語(ギリシャ語及びロシア語)においてこの単語は何を表す言葉かと言うと、「親鳥が、卵を育てるべく翼の下に覆っている、慮っている状態」を表している。そうすると、正教のハリスチアニンであれば、誰も思い浮かぶのが神・聖神[°]への祈祷文「天の王慰むるものや、真実の神[°]、在らざる所なきもの、満たざる所なきものや、万善の宝蔵なるもの、生命を賜うの主や…」である。私たちに生命を与えているのは神・聖神[°]であること、また天地創造の始めから、万物は死んだものではなく、これから成長するもの、育つものとして存在していたということを教えているのが、この「育」という字である。「おおっていた」だけでは、物理的に「おおっていた」ことは解るが、そこにある神の慮りと神・聖神[°]の働きまで読みとるのは難しい。

信仰にとって本当に「わかり易い」理解をもたらしてくれる訳はどちらなのかが判ると思う。

さらに、正教会日本語訳語の中で、注目すべき訳語として、次の例が挙げられる。これは、ギリシャ語の聖書においても、ロシア語の聖書においても、二つの違う概念を表している箇所について同じ単語を用いているのに対し、正教会日本語訳は、この二つの箇所に、読みは同じでも違う漢字を当てることによって区別しているという例である。

その二つの箇所とは、次の通りである。

[1] ^{はじめ}元始に神、天地を造れり。(創世記1;1)

[2] ^{はじめ} ^{ことば}太初に言有り。(イオアン伝1;1)

実は、この二つの「はじめ」は、意味が違うのである。ラプヒンの聖書注解書にある通り、創世記の「はじめに」は、創造におけるプロセスの「始め」を指しているのに対し、イオアン伝の「はじめに」は、全ての思慮、全ての時代の前と言う意味で、神・言(三位一体の第二位)の永遠性を表すものである。ギリシャ語もロシア語もその違いを言葉のうえで表現していないのに、日本語が漢字を使うことによってその違いまで表しているのは驚くべきことである。少なくとも二つの箇所に違う漢字が用いられていることに気が付いた日本人は、何か意味が違うであろうことを悟ることができる。

見えざる世界を「訳す」ということについて

聖書の翻訳に携わったある人は、次のように言っている。

「聖書翻訳は技術ではなく、祈りによる宣教の業である」。

これは、聖書の翻訳を頂点とし、正教の聖神^o性に関する書を翻訳する際に言える真実である。目に見えるものを翻訳する場合には、例えばそれがコンピューターの使用書であれ、料理のレシピであれ、ロシア語の単語を日本語にして、然るべき順序で置き換えると意味が通ずる。ところが、目に見えない霊的世界の概念は、まず翻訳される側の言語に対応する言葉が存在しないということは、そのような概念も存在しないのである。「りんご」のように、「ほら、これがりんごというものだ」と言って見せることもできない。このような場合、無理やり単語をロシア語から日本語に置き換えてみたところで、それは何も言っていないのに等しい。「言葉は日本語なのに、何も意味が伝わってこない」という現象が起きる。これでは「訳した」ことにならない。

見えざる世界のことが、読んでいる人の腑に落ちるような訳というのは、まず訳者が祈りによってその霊的な意味を悟っていなければならない。それを表す対訳は、すでに辞書の中に探すのではなく、その人の霊の中から湧き出でるのである。

正教会用語の中には、まだ日本語の中に定訳を見出していない概念を表す言葉が少なからずある。明治期には、正教会において質の高い翻訳事業がたくさん行われたが、もちろんそれで全てが訳し尽くされたわけではない。日本語で理解し、親しみ、生命の糧とすることができる本を手にしたいと望んでいる信徒がいる限り、聖ニコライ・中井訳の翻訳＝「宣教の業」は、途絶えさせることなく受け継いでいくべきであろう。

(以上 資料作成 :
司祭 ニコライ・ドミョトリエフ)